
守護騎士

レイフォルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護騎士

【Nコード】

N2994BA

【作者名】

レイフォルス

【あらすじ】

主人公が乗った自動車が事故に合い、乗っていた家族は皆死んでしまった。重度の重傷を負った主人公が唯一助かる方法とは……？

男から女への性転換モノです。

回想（1）

深く沈んでいた意識が浮上していき、覚醒の兆しを見せる。彩っていた穏やかな黒が白に変換され、薄らと開けた双眸に光が入り込んだ。

最初に視界に入り込んだのは見覚えのない真っ白な天井。背中からは柔らかな布団の弾力がし、自分が寝ているのだと理解する。

窓が開けられているのか、右側からは涼しげな風が室内に入り込み、頬を撫る。パタパタと揺れるカーテンの隙間からは太陽の陽が差し、光りの筋を作り上げていた。

「此処は……何処だ……ッ!？」

自分の絞り出した声を聞いて驚く。口から呟き出された声は聞き慣れた己のモノではなく、何処か甲高い声だった。そして、その声音は何所かで聞き覚えがあった。

……一体何が……。俺は確か家族と車で出掛けている筈だった。なのに、何故俺は此処で寝ている……? ?

母さんと父さん……凜音姉ちゃんは何処……? 皆は何処に居るんだ……。

家族の顔を順に思い出しながら、義孝は身体を起き上がらせようとすする。しかし、

「身体が、動かない……!？」

義孝は愕然とする。腕に力を入れても全く動かず、首を動かすのもやっとの事だった。身体に力が全く入らなかったのだ。

くそっ 何なんだよ！！ 一体何がどうなってるんだ！？ 皆は何処かに行っちゃったし、何故か身体も動かないし、訳が解らないッ！！

一体全体何がどうなっているのか。自分の身に何が起きているのか。何も解らない故に、余計恐怖を煽る。

義孝は意地でも自分の身体を動かそうと、何度も藻掻いた。だが、その行為に意味などなく、たったそれだけの事で息が切れる。

「…………ハアハア…………マジで、どうなっているんだよ…………」

身体のを抜き、グツタリと布団に身を預ける。息を整えながら「ふう」と溜息を付いた時、視界にとあるモノが映り込む。

それは細くて白い肌理が細かい手。手首から先は更に括れて細く、水仕事とは縁のなさそうな綺麗な手だった。

だが、これはまだまだほんの序の口だ。開いた窓ガラスに反射して映った己の顔が、姉と同じ、否、“凜音” 其の物の顔をした自分が其処に居ただけだから…………。

あの後、悲鳴を上げた義孝に看護婦が駆け付け、そのまた後に医師

が慌てて部屋にやって来た。

診断された後、何があったのかを問うと、神妙な顔をした医師が一言、「事故にあったんだよ」と告げられた。

更に医師はポツポツと呟きながら、ゆつくりと義孝に説明した。子供の義孝でも解るように、丁寧に。

義孝が乗った自動車は反対車線から飛び出した大型トラックと正面衝突し、大破した。前部座席に乗っていた両親は衝撃で潰れ、即死。痛みも感じる暇はなかったと言う……。

凜音は頭をかなり強く打ち、病院に搬送されても意識が戻らなかった。打ち所が悪かったのか、診断の結果、脳死と判断された……。

そして義孝は重度の重傷を負い、殆ど手の施し様がなかった。このままでは誰も助からないと判断した病院の医師達は義孝の脳を摘出し、ほぼ無傷の凜音の身体に移植したらしい。

この手術は博打と言ってもいい程のものだった。移植に成功したとしても8割以上が意識が戻らないか、身体が拒絶反応を起こして死ぬ確率が高かったからだ。

けれど、義孝は無事に意識が戻り、それからも順調に回復していった。

回想(2) (前書き)

誤字があったので修正。

今日は更新しませんが、明日はします。

回想（2）

両親が死んでしまった事は矢張りショックだった。だがそれよりも姉を殺してまで生き延びた事実に関心が深く抉られる。

脳死とは言え、凜音はまだ生きていたのだ。脳死は個体の死だと捉える考え方も確かにあるが、それでもまだ生きていた。

義孝は凜音の身体を奪ってまで、生きたくはなかった。それは姉を自分が生きる為に殺す事と同義だから……。

「どうして……なんでこんなことに……」

つい先日までは何処へ行くか楽しく相談し、一緒に笑い合っていたのに、今はもう誰も居ない。一緒に居る所か、笑い掛けてくれる事さえもう二度とない。

まだ12歳、小学六年生の義孝にとって、家族とは居て当たり前存在だった。けれど、失って初めて、その存在の尊さに気が付いた。しかし、今頃気付いても時は既に遅い。逝ってしまった人は生き返らないし、二度と還って来る事はないのだ。

何で、こんな事に……。どうして、俺だけが生き残ったんだよ！！

俺も、俺も一緒に死ねば、こんな苦しい思いをしなくて済んだのに……なんで俺だけ置いて逝ったんだよ……。

皆が居ない生活なんて、耐えられない……生きていく、自信なんて

ないよ……。

蘇る記憶、触れ合った時間、楽しかったあの日々をもう迎える事が出来ない……重過ぎる喪失感に義孝は感情を操作出来ず、臆て決壊した。

「うぐつ……うわあああああああああああああああああああああああ
ああああ……！」

顔を押えて悲痛な声を上げる義孝。眸眸からは大粒の涙がポロポロと零れ落ち、点々とシーツに染みを作る。

母に抱き締められた記憶、父に褒められて嬉しかった瞬間、凜音と遊んだ時間。幸せに満ち溢れていた日々をもう感じる事が出来ない。

許容する事が出来ない現実に心が軋み、悲鳴を上げる。今はそうして泣く事しか、義孝には出来なかった。

もしも、なんて都合のいいモノはない。数え切れないifを並べても、時計の針は逆には回らない。だからこそ、人は今を精一杯に生きるのだ……。

涙が止まらなかつた。拭っても拭っても切が無く、壊れたダムの様に瞳から溢れ出る。

愛していたからこそ、大事な人だったからこそ、その悲しみは計り知れない。

整った綺麗な顔は涙と鼻水でグシャグシャになり、折角の美人が台無しだった。義孝が大きな声で泣いて居ても、気を使ったのか、看護婦達は来る事はない。

だからこそ、義孝は一杯泣いた。涙が枯れて、流れ落ちなくなるまでずっと泣いた。

また次の日に、笑顔である為に。いつの日か、家族の死を乗り越え、心の底から笑える日の為に、今はたくさん泣いた……。

余談ではあるが、泣いて居る義孝の病室の前で、心配そうに右往左往している何人かの看護婦が居たとか居ないとか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2994ba/>

守護騎士

2012年1月9日20時47分発行